

令和3年度高等学校入学式 式辞

春爛漫の言葉の通り、木々に緑が映え、様々な花が咲き、光溢れる季節を迎えました。このすべての命が輝く今日の佳き日、國學院大學栃木学園理事長 川福基之先生をはじめ、同窓会会長 長谷川孝様、父母会会長 鈴木誠人様、学園本部の方々のご臨席を賜り、第62回国學院大學栃木高等学校入学式を挙げていただけますことは、私ども関係者一同、この上ない喜びであり、感謝に堪えません。

新入生431名の皆さん、入学おめでとう。教職員一同、皆さんの入学を祝福すると共に、心から歓迎いたします。また、今日のこの喜びの日を迎え、新入生の皆さんの感激はもとより、これまで深い愛情をもって育てて来られたましたご父母の皆様には、お喜びもひとしおのことと推察いたします。お子様のご入学、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

さて、高等学校は義務教育ではなく、皆さん一人ひとりが、覚悟を持って自ら選択したものです。その選択した本校ですが、まずは私学であるということを知覚して下さい。私学には建学の精神があります。本校は付属校として國學院大學の建学の精神を自らの建学の精神としてきました。國學院大學の前身である皇典講究所は明治15年に設立されましたが、開式に臨まれた総裁 有栖川宮幟仁親王の告諭において述べられた「国体の講明」と「人格の陶冶」、つまり「我が国の歴史や伝統や文化をよく学び、人格・品位を向上させ、真の日本人になる」ということが、建学の精神となっています。それをもとに表したものが、「たくましく 直く 明るく さわやかに」の校訓です。本校は、この校訓を理想の生徒像として今日まで60年以上に渡り、ひたすら教育実践を行ってきました。ですから、皆さんが新鮮な気持ちで入学式に臨んでいる今こそ、この教訓をしっかりと胸に刻み、新たな一步を踏み出してほしいのです。

では、これから皆さんが学園生活を送る上で、大切であると思うことをいくつか述べたいと思います。

私は、よく生徒たちに、「授業を通しての学びを基本として部活動や学校行事など、何事に対しても全力で取り組んでいこう」と話しています。「二兎を追うものは一兎も得ず」ということわざがありますが、「二兎でも三兎でも追いましょ」とも言っています。なぜ、そのようなことを言うのでしょうか。それは一人ひとりが限りない可能性を持っている、要するに「やればできる」ということを信じているからです。しかし、頑張っていけば時には壁にぶつかることもあるでしょう。そのような時には、アドバイスを送り、時には一緒になって壁を乗り越えるなど、常に見守り、寄り添う先生方がいます。そして何よりも、同じ方向を向き、共に励まし合う仲間が、この学校にはいるのです。ですから、皆さんには人としてごく当然である「全力で努力する」という姿勢を、本校で貫いてほしいと思います。自己の可能性を信じ、小さなことでも全力で取り組み、一つずつ積み重ねていけば、それはとても大きなものになるのです。それが3年先の卒業の時、成果となって現れ、自ずと夢が叶えられるはずです。本校の中庭に、初代学校長佐々木周二先生の銅像がありますが、その佐々木先生のお言葉です。「人間の一番美しい姿は、全力を出している時の姿である。スポーツにおいて仕事や勉強において、全力をあげて取り組んでいる姿ほど美しいものはない。それが本物である」。

次の話です。昨年11月、日本人宇宙飛行士・野口聡一さんらを乗せた宇宙船が打ち上げられ、国際宇宙ステーションへのドッキングに成功したというニュースを覚えている人もいます。その出発前に開かれた記者会見の一部を紹介します。「『レジリエンス』とは、困難な状況から立ち直ること、形が変わってしまったものを元通りにすること。世界中がコロナ禍で困難な中、協力して社会を元に戻そう、元の生活を取り戻そうという願いを込めました」。これは、野口氏が搭乗する宇宙船に「レジリエンス」と名付けた理由について語ったものです。

「レジリエンス」、それは落ち込んだり、挫折したり、心が折れてしまった時に回復する力、また、最近では、様々な環境・状況にも適応して生き延びる力を言います。皆さんにとって、今一番必要な力かもしれません。

野口氏の言葉にもあったように昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、私たちの生活は一変しました。特に学校生活は、昨年3月初旬からの休校により、仲間と共に学び合うことのできる学校生活の場が失われました。ようやく登校できる生活が始まって、感性予防対策をしながらの不安と緊張の日々、楽しみにしていた学校行事や部活動の大会なども変更や中止を余儀なくされました。皆さんは、いかに多くの失望を味わってきたことでしょうか。しかし、そのような中、多くの学校が入念な感染防止対策を行い、工夫しながら行事を実施したと聞いています。そして、何より皆さん自身、そうした逆境に負けず、自分の進路目標を達成すべく、黙々と勉強を頑張り、高校入試を突破してきました。そう考えると皆さんは、どのような困難にも負けず、逆にそれをバネにする「強さと柔軟性」つまり、「レジリエンス」の土台を築いていたのです。そのことを大きな自信にしてほしいと思います。高校時代においても「人は困難を克服するたび強くなる」ことを心に留め、様々なことに対して恐れることなく挑戦していきましょう。そうすることで皆さんのレジリエンスもさらに大きく育ち、これからの時代を切り拓いていく力となっていくことでしょう。

では、皆さんに伝えたいことをもう一つ。ここ数年、日本は幾多の自然災害に見舞われ、この栃木も一昨年、大雨の被害に遭いました。そこから私たちが改めて学んだことがあります。「人は一人では生きていけない。皆で支え合って生きている」ということです。災害が起きても、多くの人たちがボランティア活動に出掛けていったように、この世の中は必ず手を差し伸べてくれる人たちがいるのです。ですから他を思いやり、そして、すべてのことに「ありがとう」と思える感謝の気持ちを持てる人になってほしいのです。また、グローバル化が急速に進行する21世紀は、異なる文化、異なる背景、異なる能力を持つ多くの人たちと協働する時代です。多様性を認め、それぞれの価値観を大事にする中で、協力し合う柔軟性を持っていることが大切になります。今年、東京オリンピック・パラリンピックが開催される予定ですが、まさに、そうした時代の象徴であり、皆が多くのことを学ぶ機会になると思います。そして、誰もが一人ひとり、かけがえのない存在であり、他の人々もまた、かけがえのない存在であることも改めて認識することでしょう。皆さんもそのかけがえのない自分自身の良さを、まずは、しっかりと認識し、同時に、感謝の心を持ち、他を思いやり、支え合い、互いに切磋琢磨してほしいと思います。そのことが将来、皆さんを社会に貢献する人へと成長させ、「他のために」という生きる目的の一つを与えてくれるはずです。

最後に、皆さんの先輩が入学した時の作文の一節を読みます。「今までの私は親に頼りっぱなしでした。ですから、高校に入学したことを機に自分のことは自分でやる自立した生活を送れるようにします。國學院栃木に入学したいという意志を尊重してくれた親に感謝の気持ちを持って自分なりに何事にも精一杯の力で取り組み、充実した学校生活を送っていきます。これから、たくさん勉強して夢を叶え、いつも背中を押してくれている家族、そして、支えてくれているすべての人たちに必ず恩返しをします」。

以上、皆さんのここ太平台での成長を心より願い、式辞といたします。

令和三年四月六日

國學院大學栃木高等学校

校長 青木一男